
捕らわれのカナリア

片倉葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

捕らわれのカナリア

【Nコード】

N3292U

【作者名】

片倉葵

【あらすじ】

愛に狂った幼馴染はただ愛してるの言葉だけをささやき続ける。そんな彼に恐怖を抱いたユーリは彼の元から逃げ去った。逃げ切れなかった。逃げ切れたと思っていたのに……!!

(前書き)

シリアス系統が書きたくて書いてみました。

ユーリはドクドクと痛む心臓を抑え気丈にも立ち続けていた。
目の前の神父が放つ誓いの言葉も、なにもかもが頭に入らない。
ただただ逃げたいと思う気持ちで一杯だった。
否、逃げようと思えば逃げる事は可能だ。

叫べば良い。

この結婚は無効だと。

叫べば良い。

この結婚が嫌だと。

そうすれば全てがなかった事になる。

優しい母は、優しい父は、全力でわたしを守ってくれるだろう。

「では、指輪の交換を」

神父の言葉が、やっと耳に届く。

神父が持つのはとても豪華な白い箱。

その中身は2つの指輪。

ソウルエンディング

その名の通り、魂の終わりを示す宝石。
ダイヤより高価でダイヤより美しいこの宝石は加工が難しく希少価値もとても高い。

市場ではめつたに出回らないため幻の鉱石とも呼ばれている。
市民は見る事さえ叶わないこの宝石は主に貴族や王族の結婚に用いられる。

そして、はめれば最後。
二度と外れないという曰く付きの呪いが宿っていた。

それを、はめられる。
左手の薬指に。

嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ！！！！

溢れ出そうになる涙を堪えて手を男性に差し出した。
愛おしげにその手を受け取る男性の顔は幸せに満ちていた。私と、違つて。

「はめますよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい」

キユンという不思議な音と共に白い指輪がはまり、契約は絶対のものとなった。

主を得た事で美しく光り輝くソウルエンディング。

もう、逃げられない。

「ユーリ、君に永久とわの愛を誓おう。いつ、いかなる時もわたし、レ

シル・シルクは君を愛し慈しむ。だから、君からの愛の証を、わたしに下さい」

愛を囁くのは完璧な男性。

短く切りそろえた銀髪は風を受けてサラサラと靡き、長い睫毛に縁取られた瞳はまるで極上のアメジストのように澄んでいる。

顔立ちはどちらかといえば中性的だ。

着る物を誤れば十人中十人が女性と答えるであろう程に美しく整っている。

体付きも華奢な方だろう。

しかし程よく付いた筋肉が彼を男性だと証明している。

純白の、通常であれば苦笑してしまうほど型に沿った騎士のような格好も不思議と彼には似合っていた。

性格は至って温厚。

優しい雰囲気、フェミニスト。

地位も名誉もあり、遠縁には王族の血が混ざったお人もいる由緒正しい貴族様。

完璧である。

女が放っておくわけがなかった。

そんな彼と私はいわゆる『幼馴染』という奴だった。

私の母と彼の母が親友。

そして親同士が交わしたお約束の展開が『口約束の婚約』

子供の頃はそんな事どうでも良かった。

身分とか、周りの事とか、そんな事関係なく共にいた。

将来は結婚すると言われていても、意味も分からずただ一緒にいられる事だけを喜んでいた。

しかし14歳になる頃に私は理解した。

庶民出の私と大貴族である彼。

国を守る王国騎士で国王の信頼も厚い彼と日々食べる物にも困る私。

そんな彼と私が結ばれる事があるのか。

あるわけがない。許されるわけがない。

傍にいる事さえ罪だ。

たとえ親同士が許しても、国王が許しても。

『愛しています愛しています愛しています愛しています愛しています』

狂ったように彼は愛を囁く。

彼は現状を理解していなかった。

何度も何度も身分が違つと、許されないと叫んでも彼は安心して下さいと言っただけ。

なにが安心しろというのだ。

あの嫉妬に狂つた女達の顔が見えないのか。

あの憎しみを浮かべる貴族達の顔が見えないのか。

このままでは殺される。

毒を飲まされ、

暴行を受け、

屈辱の中、殺される

！！

その思いに取りつかれた私は逃げた。

彼はもうダメだと悟つた私は死に物狂いで逃げ、逃げ切つた。

海を渡り、砂漠を渡り、やっとたどり着いた南の安息の地。
小さな島国でけして暮らしは楽ではなかったが幸せな日々を過ごせていた。

しかしその幸せも長くは続かない。

どこから情報を入手したのか、安らぎは一年と持たなかったのだ。
街はネズミ一匹通れないよう包囲され、私は兵の手によって丁重に彼の元へと連れて行かれた。

悪魔のような綺麗な顔で彼は微笑んだ。

『逃げられると思っていましたか？つかの間の自由は楽しめましたか？なら、もう良いですよね』

スツと目を細め彼は私に口づけを、

『あなたはもうわたしのもの。逃がしません、逃がす気すら起こさせません。諦めて、わたしを愛しなさい・・・ああ、そうだ。それでもなお逃げようとするのであれば』

ゾツとするような冷たい目で見つめられ、

『全てを消し去りましょう。あなたが頼る者を。あなたが頼る国を。全てを、亡くします』

これは本当にあの彼なの・・・？

『手始めに、この街を消してしましましょう。そうすれば諦めも付くでしょう』

やめてと、叫んだ。

なんでもするから、それだけはやめてと。

私のせいで沢山の人が死ぬ。

それは耐えがたいものだった。

『………そんなに、大切ですか？』

コクリと頷けば彼はいつそう残酷に笑う。

『残念です』

……え？

『あなたの心を奪うこの国を、わたしは許す事が出来ません』

兵に残酷な命を下す彼はどこまでも非情だった。

逃げまどう人達。

焼かれる村。

それが脳裏に浮かぶ。

ここは自国ではない。

そんな真似をすれば先制布告とこの国に取られても不思議ではない。

否、取らないなんてことはあり得ない。

その結果は火を見るより明らかだ。

かつての大戦争がまた起こってしまふ。

沢山の人が死ぬ。

『や、やめてください、お願いしますから!!!』

『・・・ねえ、本当の事を言ったらどうですか?』

『本当の・・・事?』

『・・・この国に好きな男がいるのでしょうか?』

そんな人、いない。

いるはずがない!!

『そ、そんなのいません!!』

『でも、レシユールが言うんですよ。あなたがこの国を頼ったのは愛する男がいるからだ』

レシユール・ミデイス。

ミデイス男爵の長女でレシルの婚約者候補・・・

『許せません。あなたが私以外の男性を見るなんて・・・だからこの村を消してしまいましたよ。そうすればあなたの想い人は消えま
すし、諦めがつくでしょう』

殺してしまえば、誰も頼れなくなりますよね?

『焼き払いなさい』

レシルの命を忠実に騎士たちはこなそうとする。
その目に光はなく、止めることなど出来ないであろう。
そう。レシル以外は。

『止めて止めて止めてええ！！いないの！！好きな人なんていないから！！！！』

『全員死ねば良いのです。そうすれば、あなたはわたし以外を見なくなる』

濁りきつた目が私の視線を捕えた。
ゾツとするほど、冷たい目。

狂気に染まりきつた彼は本当にこの村を破壊しつくすまで止まらな
いだろう。

『いやあああああああ！！！！！！』

恐怖にかられた悲鳴が、私の耳に届いた。
女性が1人、犠牲になろうとしている。
髪を掴まれ、地面に投げ捨てられる。
騎士が持つ剣が、女性の体を捕える。

『助けて！誰か助けてええ！！』

一心に慈悲をこう女性に、騎士が心動かされる事はない。
あの人は、私にとっても良くしてくれた人。
そしてその後ろで次の犠牲になろうとしている男性は、私が怪我を
した時真っ先に手当てしてくれた人。
この村の人は誰もが優しくして・・・

『あなたのせいですよ』

『………あ、ああああ!!』

『あなたがわたしから逃げなければ、わたしを愛していれば、この人達が死ぬ事はなかったのですよ』

『そんな……』

『でも、もしあなたがわたしを愛しているのであれば……』

あなたの願いどおり、この村の住人を助けても良い。

それはまるで麻薬のように私の心に浸透した。

そして、私は選択をした。

心にもない言葉を吐き、彼を止めた。

『………あ、……あい……愛して……います』

『なんですか』

『私が愛しているのはレシルです!!他にはいません。本当です!!だから止めさせて。お願いだからああ!!』

彼の濁った眼に光が少しだけ、宿った。

ゆっくりと彼は私の視線に自分の視線を合わせて口を開いた。

『愛していますか？』

コクリと、頷く。

すると彼は手をあげて兵士を止めた。

そしてそのまま、その腕で私を抱きしめる。

『本当に？本当にわたしを愛していますか？』

『はい・・・愛しています』

彼の顔が歪む。

ニヤリと、人の悪い微笑みを見せ荒々しく私の唇を奪った。

とっさに出ようとすると手を懸命に止め、その口づけがただただ早く終わる事を願った。

生理的な涙が頬をつたう。

『もう逃がしませんよ、愛しい人。あなたは、わたしの物です』

耳元でささやかれる言葉。

わたしは、捕らわれた。

まるで鳥かごの中で飼われるカナリアのように。

とても大きな御屋敷の一室で、彼だけの目に映り、彼だけに愛を囁き、彼だけの言葉を聞く日々。

わたしは文字通り彼の『物』になった。

そう

死して彼から解放されるまで・・・

死んでも、逃がしませんよ

(後書き)

実は最後の言葉を書いてみたかったんです。シリアスは難しいですね(汗)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3292u/>

捕らわれのカナリア

2011年6月25日09時55分発行